鷗外 女性論集

鷗外の新しさを明らかにする画期的な精選集！

同世代の「新しい女」の動向を視野にいれて、
自ら道を切り拓いていく女性を描いた鷗外。
その文学的営為を
女性という視点から読み直す。
鷗外の女性に関する評論や随筆と、
女性を主人公とした小説・戯曲・短歌・詩を
選んで構成したアンソロジー。

金子幸代＝編・解説

A5判・並製・344ページ
2006年4月刊
ISBN4-8350-3497-X
定価◉本体価格2、800円＋税
すいせん――平岡敏夫

不二出版

はるかに広く深くなった鷗外
―金子幸代氏ならではの仕事

平岡敏夫
（文学史家・筑波大学名誉教授）

鷗外女性論集というのはおそらく始めての試みだろう。『鷗外と〈女性〉』の著者である金子幸代氏だからこそ、可能となった視点であり産物である。金子幸代氏は、鷗外とドイツの関りについて、現地でドイツ語の力を駆使し、新聞をはじめ、従来知られていなかった文献を読み、その仕事を通して鷗外がドイツ女性解放運動と出会ったことに注目、「独逸婦人会」の集会に連日出席した鷗外を動かした女性たちの発言内容まであきらかにしている。鷗外のこの出会いが帰国後の活動となり、周知の一葉『たけくらべ』の評価や海外の女性紹介、日本における女性薬剤師、あるいは「青鞜」支持等々に及ぶが、鷗外の文学的営為を女性という視点から読み直すことも含めて、この鷗外女性論集は見逃せない鷗外文を選び出している。

戦後二年目に出た岸田美子『森鷗外小論』の「鷗外の女性観」に感銘を受けたことが思い出される。そこでの安井夫人佐代の「美貌もきつぱりした気象も兼ね備へたやうな女性」にひかれると共に、〈不遇への共感〉を鷗外に見る私としては、このたびの『鷗外女性論集』を得て、鷗外がはるかに広く深いものになったとしみじみ喜んでいる。

……鷗外女性論集◎目次……

◎随筆・文芸批評
こわれ指環の評（清水紫琴）
鷄翮掻（樋口一葉・女性詩人）
三人冗語（女性作家）
与野晶子さんに就いて
「アンナ、カレニナ」序
「ノラ」解題
サフラン（尾竹紅吉）
村夫人に（松村みね子）

◎劇・小説
プルムウラ
半日
団子坂（対話）
影（煤煙の序に代ふる対話）
静
杯
生田川
花子
さへづり（対話）
なのりそ
魚玄機
最後の一句

◎独逸時代
独逸日記

◎帰国後の女性論
公娼廃後の策奈何
女薬剤師
マリイ・フオン・エプネル・エツシエンバハ
ミセス、パアトリツク、カンベル
マアテルリンクの脚本
妄人妄語
家常茶飯附録　現代思想（対話）
椋鳥通信
海外通信

◎詩・短歌
ミニヨンの歌
遠近
ふたり
三越
扣鈕
恋
火の娘題詞

解題
解説　鷗外の女性論　金子幸代

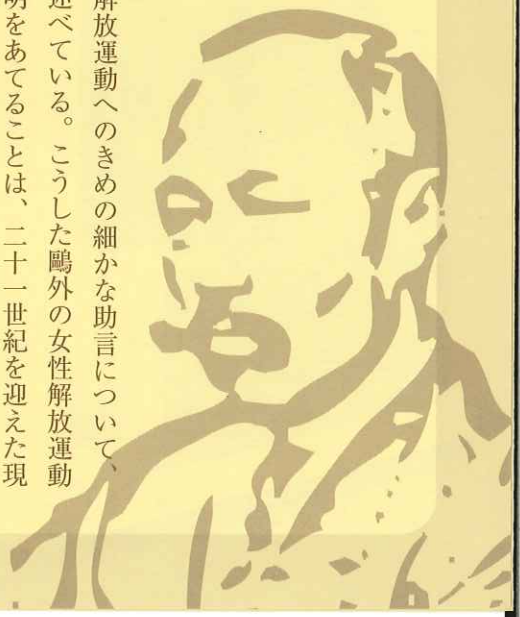
見本

「はじめに」より

本書は、森鷗外（一八六二・一・一九〈新暦二〇一七〉～一九二二・七・九）の女性問題に関する評論や創作をまとめたアンソロジーである。一八九〇年代に女性作家誕生の時代を迎えると、文壇では「閨秀作家」ともてはやされたが、鷗外は女性という性別の枠組みでしかみない風潮とは一線を画し、独自の視点から女性作家を評価している。女権活動家清水紫琴の『こわれ指環』を逸早く評価し、樋口一葉の『たけくらべ』を激賞したのも鷗外であった。一九〇九年一月の「スバル」創刊号に戯曲『プルムウラ』を発表し、以後、女性が主人公になる戯曲を次々に書いている。父の仇を討つ十五歳の姉娘を主人公にした『プルムウラ』は、父の敵討ちを成し遂げるりよ（『護寺院原の敵討』）や、父を救おうと奉行所に嘆願に行くいち（『最後の一句』）につながる意志的で行動的な姉型ヒロインの先駆けとなる作品である。姑を批判する個性的な嫁を描いた最初の現代小説『半日』において、博士の口を借り、「これもあらゆる値踏みを踏み代へる今の時代の特有の産物か知らん」と、一九〇九年という時点で早くも「青鞜」を先頭とする「新しい女」登場の予言的発言をしていた鷗外は、さらに、一九一八年に「婦人、母、子どもの権利を守る」ために新婦人協会が結成された際には助言もしている。趣意書から規約まで丹念に読んで「朱筆までして直して」くれた（「文学散歩」一九六一・一）

と、鷗外の女性解放運動へのきめの細かな助言について、平塚らいてうが述べている。こうした鷗外の女性解放運動との関わりに照明をあてることは、二十一世紀を迎えた現在においても、解決されていない女性問題を考える上で新たな示唆を与えてくれるものとなろう。

本書では、これまであまり顧みられなかった文壇再登場前にあたる一八九〇年代までの言説も含め、鷗外の女性に関する評論や随筆と、女性を主人公とした小説・戯曲・短歌・詩を中心に選んで構成した。また、それぞれの作品の末尾に初出を示し、巻末には解説を付した。章ごとに年代順に配列したが、作品の関連が深いものは一部、年代順ではなくまとめて配列してある。本書の底本は岩波版鷗外全集により、旧漢字は新漢字に改め、仮名遣いは、原文のままとした。なお、ふり仮名、傍点は、原文のままとした。本文中、今日においてはふさわしくない表現・内容のある場合があっても、原文のままとした。



椋鳥通信

帰国後の女性論

前便の通信は、誰か社中の人がいたづらに「むく鳥通信」とした処が、木扁のむくの字が無いと見えて、掠めるといふ字になつた。或は情深い植字方が、わざと直したのかも知れない。Siberia 鉄道で、帰る雁を掠めて行つた通信だと見てもらつて好いのである。○前便に書くことを忘れたが、昨年一九〇八年十二月二日に亡くなつた

Ilse Frapan-Akunian

は一八五二年二月三日に Hamburg で、仏蘭西から移住して来た Levien といふ一族の家に生れた。一八八四年から Stuttgart の大学にはいつて、当時審美学を講じてゐた Theodor Vischer の講堂で、いつも一番前列のベンチに目をかゞやかしてゐた女学生は此人であつた。Zürich に転学してからは、医学と化学とを聴いた。千八百九十何年であつたか、Armenia の文士 Akunian の妻になつて Genève に居を占めた。初期と晩年との作は、多く Hamburg の地方的色彩を帯びたものであつたが、中年には夫の影響を受けたと見えて、東洋的の趣味も見えた。今大阪に帰つてゐる北里闌が脚本を出したとき、頗る妥な批評をしてくれたのは、同郷人のために嬉しかつた。兎に角惜しいをばさんを亡してしまつた。

○英国の外交官で公使に出てゐた Gordon の未亡人

随筆・文芸批評

解題

こわれ指環の評

明治二十四年（一八九一）二月「文則」第五号に「鷗外漁史」の署名で掲載され、後に『月草』（春陽堂　一八九六・一二）に収められた。清水紫琴（一八六八～一九三三）は女権拡張運動の先駆者で、後に「女学雑誌」の主筆となる。『こわれ指環』（「女学雑誌」一八九一・一）は紫琴の処女作である。

鷄翮（しぎのはね）掻（ばか）

明治二十九年（一八九六）一月「めさまし草」巻之一以下、二月巻之二、三月巻之三、四月巻之四、五月巻之五、六月巻之六の六回にわたって「歸休庵」（巻之四以下「庵」は「菴」）の署名で「鷄翮掻」と題し、新刊批評を連載。田辺花圃、北田薄氷、大塚楠緒子、田沢稲舟らの小説のほか、若松賤子や小金井喜美子の翻訳の紹介をかねた批評を行う。樋口一葉（一八七二～一八九六）の『十三夜』などが取り上げられている。

三人冗語

明治二十九年（一八九六）三月「めさまし草」巻礼含）、斎藤緑雨（登仙坊）、幸田露伴（脱天子）の九六）の賞賛の辞が有名である。『たけくらべ』ものを「ひいき」、「第二のひいき」としてその

『火の娘』　荒木 郁 著　尚文堂書店 刊　大正3年（1914年）
函、表紙

鷗外自画素焼皿（鷗外記念本郷図書館 提供）

一　女性解放運動との出会い

二十一世紀は女性の時代といわれるが、その源流は明治、さらには江戸期にまで溯れるだろう。明治の文豪鷗外もその流れを作る上で大きな役割を果たした。その原点となったのがドイツ留学時代である。一八八四年（明治十七）から一八八八年（明治二十一）にわたるドイツ留学期間で鷗外は、ベルリン・ライプツィヒ・ドレスデン・ミュンヘンの四都市に滞在して陸軍衛生制度調査と軍陣医学の研究に従事した。四都市の中でも最初の留学都市であるライプツィヒは、ゲーテも学んだ大学都市として有名である。ここで鷗外は文学に開眼し、医学生仲間以外に音楽家や印刷関係で働く人たちなどさまざまな職種のドイツ人と交流をすることができた。

遠い東洋の地、日本から来たばかりの鷗外にとって毎日の生活が驚きの連続だった。日本とは違い、ドイツ女性がボートを漕いだり、スケートをしたりと屋外で活発に行動する姿に接した驚きを日記に記している。とりわけ鷗外の女性論を考える時に忘れてならないのは、ドイツ女性解放運動との邂逅である。当時のドイツには、ルイーゼ・オットー・ペータースが主宰する Allgemeiner Deutscher Frauenverein「独逸婦人会」があった。「独逸婦人会」は、一八六五年に設立され、女性の教育向上と仕事の門戸開放を推進することを目的とするドイツ初の女性団体である。

鷗外は留学したライプツィヒで偶然にもルイーゼの親戚であるフォーゲル夫人の家に昼夜の食事に通っていた。その縁で、フォーゲルの娘で女学校教師をしていたニィダーミュラーとともに、ライプツィヒ市内で開催される第十三回婦人総集会の傍聴をするという貴重な経験をすることになったことが、一八八五年（明治十八）九月二十八、

尾竹一枝＝主宰〔大正3年3月～8月刊〕

番紅花（さふらん）《総六冊・別冊一》

青鞜社を退社した尾竹一枝が、小林歌津、神近市子らとともに創刊。東西の音楽、演劇、美術等、尾竹の初々しい興味と個性がいきた「純芸術雑誌」である。神近や八木麗子の小説、歌津の戯曲、青山（山川）菊栄の両性具有論の紹介等々が掲載された重要文献。

●別冊＝解題（渡邊澄子）・総目次・索引
●菊判・並製・函入・総1、408頁【残部僅少・美本ナシ】
●本体揃価格35、000円＋税（復刻版）　ISBN4-8350-3704-9

鈴木裕子＝編・解説

岸田俊子文学集

湘煙（＝岸田俊子）は日本で最初のフェミニストであり、近代日本史上初めての女性作家であった。その教養の深さと広さを偲ばせるすぐれた漢詩と、小説、随筆を網羅し、湘煙文学の全貌を伝える。

〈本書の内容〉Ⅰ　山間の名花（善悪の岐　山間の名花　伯爵の令嬢　一沈一浮）／Ⅱ　大磯だより（白沙青松の郷　大磯だより　ここちよき）／Ⅲ　湘煙詩抄（春夜作　懐ひを長城外君に寄す　秋興）

●A5判・上製・函入・272頁
●本体価格3、600円＋税　ISBN4-8350-3828-2

岩田ななつ＝著

文学としての『青鞜』

『青鞜』の本質は文学にある――女性による女性のための文学雑誌として登場した『青鞜』。女性解放思想雑誌として展開した後も原動力となったのは、小説で自己表現したいという女性たちの欲求であった。『青鞜』の文学を読み解き、文学史上で『青鞜』が果たした役割を再評価する意欲作！

●四六判・上製・280頁
●本体価格1、800円＋税　ISBN4-8350-1261-5

渡邊澄子＝著

青鞜の女・尾竹紅吉伝

青鞜社、在社期間わずか九ヵ月。そのとき紅吉、十八歳。「新しい女」として彗星のように現れ、『青鞜』を『青鞜』たらしめた天性のフェミニストは、自由恋愛と性差別の桎梏に苦悩もした、まさに女の近代を体現した存在だった。

尾竹紅吉＝富本一枝の初めての本格的評伝！

●四六判・上製・380頁
●本体価格3、500円＋税　ISBN4-8350-3874-6

ビアトリス社＝刊〔大正5年～大正6年刊〕

ビアトリス

『青鞜』廃刊直後の一九一六年七月に創刊された本誌は、『女子文壇』『青鞜』に連なる、女性に開放された自己表現の場であった。執筆者には平塚らいてうのほか、今井邦子・生田花世・岡本かの子・吉屋信子・三ケ島葭子・原阿佐緒などがいる。女性文学雑誌の枠にとらわれず、女性問題への関心も深い。

●解説（岩田ななつ）・総目次・索引付き
●菊判・上製・650頁
●本体価格18、000円＋税（復刻版）　ISBN4-8350-1522-3

岩田ななつ＝編・解題

青鞜文学集

創刊から一世紀近くを経てもなお、フェミニズムの金字塔として色あせない『青鞜』（平塚らいてう他主宰、一九一一年～一六年刊）。

その出発点であった「女性と文学」にこだわって全五二冊から小説を中心に珠玉の二〇点を選び収録。

●A5判・並製・256頁
●本体価格2、000円＋税　ISBN4-8350-3124-5

●表示価格はすべて税別。

不二出版
〒113・0023
東京都文京区向丘1・2・12
電話03・3812・4433
ファクシミリ03・3812・4464
振替00160・2・94084